釣れ釣れなるままに

２０１５年思い出の釣行記 PART．１

砂川遊水池のワカサギ

鹿島釣狂

電動リール

新聞情報では、砂川遊水池の氷が張り、釣果も上がっていると報じられていた。釣具店に出向きワカサギ仕掛けを物色していると、桂沢湖、篠津湖、砂川遊水池仕様の仕掛けが陳列され、ワカサギテント、電動リール、暖房機なども取り揃えてワカサギ釣り一色の品ぞろえになっていた。リールを手に取って見ていると、店員が近寄ってきてアドバイスをしてくれた。

彼は電動リールを勧めてくれた。機能も格段にアップして、操作の方もそれほど難しくはないそうだ。巻き上げスピードが速くなって、深棚では圧倒的に有利で、最近はこちらの方に需要が伸びていると購入者の心理を突いてくる。私は、電動リールも試してみたいという気持ちはあるが、どうもデジタルは苦手で使いこなすまで時間がかかってしまうような気がすると固辞して、アナログの手巻きリールに手を伸ばした。その某有名メーカーのカウンター付きリールは、昨年まで売れ行きが好調だったが、なぜだか製造を中止してしまった。その代替えのようにして他のメーカーから同じ形で同じ機能を持つものが格安で販売された。店員に言わせるとスプールの回転は絶版されたものの方が滑らかさに優れているそうだ。そして、この店にはこの１個が残っているだけだと、またもや消費者心理を擽（くすぐ）る。私は少しでも軽い錘を使いたいので、若干値は張るが絶版になった方を選んだ。リールに巻いてもらった０．６号の道糸には、ご丁寧にも１ｍごとに印が付いていた。

ついでに竿を購入することになった。竿も高価なものへと導いてくれるのだが、私が手に取るのは格安の方ばかりなので、店員は、もうそれ以上は勧めても無理だと諦めたらしく立ち去ってしまった。

ワカサギ竿：氷湖６０　ホスボソトップ、リール：ダイワ　わかさぎ棚ハンター
家に帰って、早速いじくって遊んでいると、ふにゃりと竿先が曲がってしまった。リールを巻きすぎてしまったのだ。電動リールならそれを感知して自動で巻き上げをストップしてくれると言う

過去最高の釣果

１月１１日（日）、朝６時にタイマーをセットして床から起き出して、７時半には遊水池の畔にある駐車帯に着いた。車は１５台ほどが停まっていた。約束していた釣友の堀部安兵衛の車はまだ見当たらなかった。氷の上の雪を除け、穴を開けてからテントを設置し、仕掛けを結びエサを付け終わったところで、テントの外から「釣れるかぁ」と安兵衛から声がかかった。私の車とテントを見つけて声を掛けてきたのだ。そして、私の隣でごそごそと準備に取り掛かった。私は安兵衛が好んで入る場所であらかじめテントを張っていたのだ。同じテント内でなくても、近くで声を掛け合い、釣れ具合を確かめ合いながら、自分の釣りをしていくのだ。たとえ言葉は交わさなくても僅かな物音や洩れだす呻(うめ)きで釣れ具合を感じることも出来るのだ。なにより張り合いが出るというものだ。

まずはリールの付いていない手羽竿で３０㎝ほどの厚さになった氷のすぐ下を狙ってみた。小型だが、次から次へと釣り盛る。釣具店では、砂川遊水池のワカサギの放流が復活したことを聞いていた。なるほど、ダブル、トリプルと数が上がるが大型は少ない。昨期は、放流が中止されていたので、数は少なかったが大型が多く釣れたのだ。

仕掛けを落とした途端にアタリが出る状態が続いたが、そのうちに３秒、４秒、５秒と間が開くようになった。深棚ではどうかと、昨日購入したばかりのリール竿を取り出して、同じ仕掛けを付けてべた底に落としてみた。底に着いた時点でアタリが出る。ダブル、トリプルもある。しかし、何と言っても手返しが悪い。水深は５ｍほどなのだが、仕掛けを底まで落として、氷上まで巻き上げるのに時間がかかってしまうのだ。表層では手羽竿が圧倒的に有利だ。今日は中層で頻繁にアタリが続いたので、手羽竿に戻したり、リール竿に替えたりしながら釣り続けた。

１１時ころに一端アタリが止まったところで、休憩がてら安兵衛のテントを訪問する。彼は、「お前が覗いた途端にアタリが復活し出した」とダブル、トリプルと釣り上げている。おそらく彼独特の社交辞令なのだろう。何しろ彼がいつも放つボヤキは聞こえて来ていなかったのだ。私が彼のテントに潜り込んだ時の為に、私用の穴も開けて待ってくれていた。石

油ストーブの上でシュンシュンと湯気を立てている薬缶から湯を注ぎ、熱々のコーヒーを入れてくれた。そして、私のテントに戻るころには、これも熱々の甘酒を持たしてくれた。

自陣に戻っておにぎりを頬張りながら釣り続けた。こんなに釣れるのを期待していなかったので、小さなタッパウエア一しか用意していなかった。それにワカサギを入れていくのだが、タッパから溢れて氷の上に飛び出し、開けた穴に戻っていくものも出てきたので、これまで釣ったワカサギをビニルの買い物袋に移し替えた。このままいけば千匹の大台に届いてしまいそうだ。

しかし、なんとプスプスと音を出して手元暖房が消えてしまった。ガス欠だ。これがないといくらテントの中といえども手が悴(かじか)んでいうことを利かなくなってしまうのだ。今日の場合は氷点下に近い魚を引っ切り無しに触っている。濡れた手を手元暖房の近くに翳(かざ)していると手から湯気が出ている。手は濡れたままなのだが、凍えてしまっていうことを利かなくなるようなことはなかった。それが、これからはないのだ。釣りを諦めざるを得ないだろう。帰り支度を始めていると安兵衛もやめてしまったようだ。安兵衛は、明日も来ると息巻いている。

手元暖房がガス欠した。

自宅に戻って重さを量ってみると、１，６８０ｇでいいままでの最高釣果だった。１匹２ｇとすると１０００匹には届いていないだろう。性懲りもなく数えてみる。残念ながら７９２匹だった。安兵衛は宣言通り次の日も出かけて、２４００ｇだったという。彼は匹数を数えることなどしないのだが、おそらく１０００匹は超えていたのだろう。私なら絶対数えてみるところだ。

１月１１日の果　１６８０ｇ

討ち入りの会

１月１６日（金)、以前紹介したことのある学生時代の４７年卒業の同期で組織している「討ち入りの会」の新年会が、旭川で開催された。「忠臣蔵」の敵役でいなくてはならない吉良上野介役である私は、堀部安兵衛とともに出席した。「討ち入りの会」には釣り同好会も組織されており、その仲間に砂川遊水池の釣果を報告した。私の釣果もさることながら、１０００匹超えの安兵衛の釣果に皆驚いたようだ。

その話を聞いた釣り好きの赤穂浪士たちは、翌日１月１７日（土)、朱鞠内湖で予定していたワカサギ釣りを砂川遊水池に変更して、討ち入りすることになった。「討ち入りの会」を組織した浅野内匠頭が自ら御出ましになり、それに吉良屋敷討ち入りの裏門大将である大石主税が御伴をし、忠義に厚い馬廻江戸詰の赤埴源蔵が御世話役に回った。私は勤務の都合で馳せ参じることは出来なかったのだが、高田馬場の助太刀で１８人斬りを果たした岩見沢在住の堀部安兵衛が出迎えた。

結果は、安兵衛の１４００ｇに比べて、旭川から駆け付けた浪士たちは、１００匹にも満たない釣果だったという。ご指南役の安兵衛の打ち方を見習わず、それぞれ独自に編み出した打ち方で臨んでいたのだそうだ。

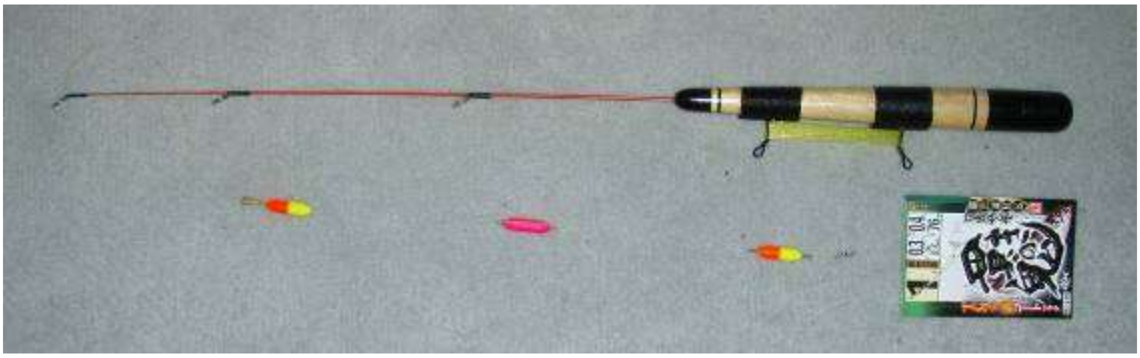
その釣果に満足いかない源蔵は、その次の日、他の浪士２名を誘って、朱鞠内湖に討ち入りした。朱鞠内湖ではスノーモービルを使って釣れる場所に案内してくれて、その型も大きいはずだと勇んで出かけたのだが、その結果は遊水池よりもさらに悲惨なものになって、返り打ちにあったという。

こだわり

１月２２日（木）、前回の千匹にも届こうかという釣果に、今日は５時起きで砂川遊水池に向かって出発した。もちろん手元暖房器のガスは満タンに充填しておいた。今日は平日でもあり、前回の土曜日は満車状態だった駐車場が、先行者が１台しかないという閑散状態だった。まだ夜明け前の薄暗い時間帯だったので、ヘッドランプが必要だったかなと思うぐらいだったが、テントを設営し終わった７時にはすっかり明るくなっていた。風もなく薄曇りの空模様で、今日は何だか前回を上回ることが出来るような気がしてきた。

間もなく、安兵衛も到着して、私の隣に陣取ってテントを設営した。出だしは好調だった。ワカサギがダブル、トリプルと連なってくる。しかし、前回と同じ時間帯になってくると、釣果は半減してきた。１０時に朱鞠内湖で惨敗した赤埴源蔵から電話がかかってきた。状況を伝えると、「やっぱり砂川遊水池のほうがよかったのかなあ」と呟（つぶや）いている。アタリが一旦止まったので、手羽竿からリール竿に持ち替えてべた底を狙ってみた。１匹ずつではあるが何とか釣れてくる。しかし、これも前回よりもいまいちの様だ。リール竿一辺倒で釣り続けている安兵衛に状況をいちいち確認しながら、手羽竿にしたり、リール竿に持ち替えたりしながら、１匹、１匹を丁寧に拾っていった。

午後２時には釣り終え、１，３４０ｇの釣果だったが前回には遥かに及ばなかった。安兵衛も同じようなものだった。



私の愛用している手羽竿。３０年以上も前の代物だ。

拘りのオモリ（中央が市販の仕掛に付いている一般的なオモリ）

私のワカサギ釣りには拘りがある。魚の食い込みをよくしたいという思いから、とにかく錘を軽くしようというものだ。ワカサギ釣りにのめり込み始めたころは、市販の仕掛けに付いている錘を外して、切った板鉛やＢとか２Ｂの仁丹鉛を取り付けてみた。その数も何個にするのが適当なのかも試行錯誤してきた。また、これも市販の仕掛けについている依り戻し等のスナップ類を外して道糸と直結することで軽く出来ないものかと工夫したりもした。今は、ワカサギ専用の錘が数多く出回っているので、苦労する事も無い。しかし、課題も多い。とくに深場の釣りである。錘を軽くすると仕掛けがなかなか落ちていかないというものである。それで、今年は表層での釣りが芳しくないときの為に、カウンター付きのリール竿を新しく購入してみた。この扱いもなかなか難しいものがある。安兵衛の域には全く届いていないので更に研鑽を積んでいきたい。

帰りに遅くなった昼食をまたまた奈井江の「しらかば茶屋」でとることにして、安兵衛を誘った。店の前で彼を待ったが、いつまでたっても現れなかった。店が見つからずに通り越し、美唄の街外れまで進んでしまったらしい。安兵衛に長竿釣りの秘訣を伝授してもらう目論見は外れてしまい、悶々と一人でその秘伝に思い巡らせることと相成った。

赤穂浪士参上・惨状

２月１１日（日）、ワンタッチワカサギ外しの市販品があったのでそれを購入した。ワカサギアンテナもついておりエサ付けなどの時は道糸を引っ掻けて、仕掛けを目の前に垂らすこともできるので、非常に便利な代物だ。おまけに釣り上げたワカサギの匹数を数えるカウンターまで付いている。

私は、ワカサギを釣り上げると、右手で竿と道糸、ハリを持ち、左手でワカサギを持って１匹ずつ外していた。そのために、ダブついた道糸と仕掛けが絡んだり、ワカサギを持つ左手が濡れて冷たくなったりして手元暖房で凌いでいたのだ。

前回のワカサギ釣りで、釣友の堀部安兵衛が、以前使っていたワンタッチワカサギ外しから進化させたものをテント内に持ち込んでいた。魚を外す箇所が、針金からエンピツキャップ４連式になっていたのだった。「材料も安くて工作もさほど難しくないので作ってみたら」と説明を受けていたのだが、私はどうも安易な方に流れてしまうようだ。これだから何事においても極めることが出来ないのだと思う。

ワンタッチワカサギ外し、カウンター、ワカサギアンテナ

安兵衛手製の魚外し。コーヒーカップや簡単な道具を置けるようにと板も取り付けてある。

鉛筆キャップで造った手製の魚外し。

砂川遊水池にまたまた、旭川の「討ち入りの会」の赤穂浪士たちが集結して来るらしい。

敵役である吉良上野介を称する私にもお呼びがかかって、またまた５時起きで遊水池に向かった。一緒に出迎える堀部安兵衛は、先に着いてテントを張ろうとしていた。今日は猛吹雪の予報で風が吹き荒れていたが、雪は降っては来ていない。安兵衛はそのテント張りに難儀していた。何しろ５人～６人用の大きなテントなので、まともに強風を受けてしまっては、テントを広げることさえ出来ないのだ。一緒になって何とかテントを立ち上げた。万が一の為ペグを打ってロープで引っ張った。私のテントは一人用でビーチパラソルを立てるがごとく簡単なので、どんな時でもすぐに設置可能なのだ。周りにあった雪をチョチョイと乗せて完了した。

前回の返り討ちに納得できない旭川の浪士たちが、助っ人を頼んで乗り込んできた。今回は国家老大石内蔵助とその長男大石主税、「徳利の別れ」で名をはせた赤埴源蔵、吉良上野介に一番槍をつけ、その首級をあげた間十次郎、「松浦の太鼓」外伝の主である大高源五の５名である。彼らもまた、堀部安兵衛と同じような大荷物を大型ボブスレーに乗せてやって来た。

やはり強風に悩ませられながらも、協力し合って二張の大型テントを張り終えて二人ずつ中に入って釣り始めた。遠征組の間十次郎は安兵衛のテントに潜り込んだ。しかし、テントの中から聞こえてくる声は、やはり芳しいものではなかった。浪士たちが釣り始めた時は、私にはまだまだポツポツとアタリがあり、１匹１匹を丁寧に釣っている状態だった。そして釣り始めて１００匹は超えたと思われる頃、源蔵が「ようやく１０匹になった」と言った。「俺の穴が悪いのかなあ」というので、私が彼のテントに潜り込んでやってみると、やはり釣れない。穴の所為ではないと思うのだがアタリさえ出ないのだ。源蔵の仕掛けを見ても以前のように市販の仕掛けをそのまま使っているようなことはなく、１号のハリに錘も軽いものを付けていた。竿だって扁平竿先の微妙なアタリをとれるものに持ち替えている。好調に

釣果を伸ばしている安兵衛もその穴でやってみたが、やはり無駄だった。同じテント内でやっている大石主税も不調なのだ。私は「やっぱり穴が悪い。これは墓穴を掘るというのだ。お前たちが醸し出すテント内に漂う空気も悪い」と言ってやった。彼らはすごすごとテントを移動させた。しかし、やっぱり漂わせている空気が悪いものらしく、アタリが出だしたという声が届いてきたのだが、釣れたという声はやはりいつまでたっても聞こえなかった。

赤埴源蔵が「後藤さんが亡くなった」という。討ち入りの会に後藤さんなんていたのかな。誰のことだろうと聞き質してみると、イスラム国に拉致されていた後藤健二さんのことだった。私が遊水池に向かっている最中のニュースで伝えていた。

戦争の悲惨さを知らせ、安心して暮らせる社会にしたいという願いも、理不尽極まりない暴力に打ち砕かれた。インターネットの映像では、手錠を掛けられ、不本意な伝言も読まされていた。後藤さんはシリアの友人がテロで亡くなるたびに胸を痛めていたという。いつも目線が向いていたのは、抑圧される住民、そしてなにより子どもたちだった。後藤さんはルワンダの住民虐殺を取材した著書で「憎しみと哀しみに満たされた心だけでは生きていけない。といってその相手を許すことはできないかもしれない。自分が生かされていると気がついた時に初めて考えるだろう。」と述べていた。殺戮の連鎖は、どんな理由を付けようとも社会に絶望しかもたらさない。今回の事件で日本もテロと無縁ではない現実を突きつけられた。日本もその連鎖の中に巻き込まれていくのだろうか。政府側の発言からは焦臭(きなくさ)いものが感じられる。私も、国際紛争の解決は善意だけでは難しいとは思う。しかし、その善意の力が寄り添い、生命をもてあそぶ卑劣さを凌駕していく道筋を信じていきたい。

そんなことをとりとめもなく考えながら、声の聞こえてこない遠征組のもう一つのテントを覗いてみた。内蔵助は不調の様であったが、俳諧や茶道をも嗜(たしな)む大高源五が一人気を吐いていた。私が今回購入したワカサギアンテナの代わりになるものとして投げ釣りで使う三脚をテント内に持ち込んで、取り込みも素早い。エサに牛蒡(ごぼう)虫を使っている。この牛蒡虫も、自宅に牛蒡を撒いて実った牛蒡の種から取り出した代物である。

あまりの貧果に、昼をまわったところでテントを畳むことになった。帰り際に、大石主税が「あふ時は　かたりつくすと　おもへども　別れとなれば　のこる言の葉」と別れの句を詠んだ。私も同感である。でもまた打ち合う機会があるのだと考えて涙せずに旭川組を見送った。

遠征組で一人気を吐いていた大高源五。彼はテント内に飽きて外で奮戦していた。

討ち入りの会の浪士たち。
左から大石主税、堀部安兵衛、間十次郎、赤埴源蔵、大石内蔵助

安兵衛の執念

私のテントの支柱がスムーズに動かなくなってきていたので、ＫＵＲＥ５５６を吹きかけておいた。そして、堀部安兵衛からは、４日前に２２００ｇ釣ったと連絡を受けた。テントの具合はどうなったかと車庫に引っ張り出して広げてみると、新品な傘のような感じで支柱を伸ばしたり折りたたんだり出来るようになっていた。

前回２月１日の釣行では、カンテラを下げて４時半から釣り出した先行者が大漁していたこともあり、まだ夜が明けきっていない時間帯に砂川遊水池の畔に着いた。安兵衛が先行していたのだが、なんだか駐車帯で車に荷物を積み込んでいるようにも見える。声を掛けると、物憂い仕草でこちらを振り返った。よく見ると額から血が流れ出ているのだ。訳を聞くと、月明かりを頼りに重いソリを後ろ手にしながら池に向かう急坂を登っていった。その途中で足を滑らせてしまい、前のめりになって頭から雪の中に突っ込んだ。しばらく晴天が続いていたので、池の畔までの踏み固められた道は、溶けては凍るを繰り返し、ささくれ立ちザクザクの状態だった。額の傷ばかりではなく腕も痛いので、大事をとって病院に向かう。砂川市立病院は空知の中核病院に指定されており、祝日の夜間だが緊急外来で診てもらうことが出来るだろうというのだ。

安兵衛を見送ってから、ヘッドライトを付けて同じ急坂を登っていくと、なるほどあちこちに血痕が飛び散っている。さらに１０ｍほどを進んでいくと、今朝降ったばかりの薄く積もった雪が乱れており、彼の生々しい赤い塊が真っ白な雪に染み込んでいた。

池の上には５張ほどのテントが並び、テントの中からランタンの灯りが漏れていた。前回、私たちの隣で数をあげていたテントに声を掛けると、同じペアがやはり４時半頃より釣り始めていてかなりの数を釣っていた。

まだ暗い６時に釣りを開始したが、表層では期待していたほど釣れてこない。手羽竿をリール竿に持ち替えて、５ｍほどの底を狙ってみると、１匹ずつだが、釣れるようになった。間もなく、仕掛けを落としたり上げている最中にもアタリが出るようになってきたので、またまた手羽竿で表層を狙った。

７時頃からは間断なく釣れるようになった。普段私が使っているのは５本バリなのだが、今日は７本バリにしていた。その仕掛けに一度に７匹のワカサギが連なってきた。全てのハリにワカサギが掛かったのは、初めてのことである。しかし、よく見ると空バリが１本ある。さらによくよく見ると１本のハリに２匹が掛かっていた。口に掛かっている１匹ともう１匹はスレであった。

８時に安兵衛が病院から戻ってきた。レントゲンを撮ったが腕の骨には異常がなく捻挫だったとのこと。額の方は傷が深く４針縫ったそうだ。安兵衛のことだから病院に掛かるほどの傷を負っても、そのまますごすごと帰るわけはないと思っていた。案の定、額に大きなガーゼを張ってやって来たのだ。すぐに準備をしてテントに潜り込んだ。彼の溌剌とした声から、結構な数が上がっている雰囲気が漂ってくる。

９時、釣れ方が寂しくなってくると、安兵衛から声がかかった。寂しいからこっちに来て

一緒に釣らないかというものだった。安兵衛のテントに潜り込んで釣り始めた。彼はペースを上げている。私は、彼が病院に行っている間の２時間も先行したのにすぐにでも追いつかれてしまいそうだ。その後は、ダブル、トリプルと釣れ盛ることはなく、１匹１匹のアタリを丁寧にとりながら、１３時には釣りを終えた。ワカサギが食い渋っているときにも、安兵衛の怪我の話を何度も話題に乗せては高笑いを繰り返し、お互いに寂しい思いはしなかった。

別れ際に、安兵衛から「明日も休みだから、釣りに来る予定だった。しかし、こんな傷を負った姿を妻に見せてしまっては、しばらくは釣りに出してもらえなくなるかもしれない。どうせそういうことになるなら、今日は思う存分釣ってみたかった。」と心の内を聞かされた。しかし、そう言っていたはずの彼は、次の日も砂川遊水池に穴を開けていたのだという。私はともかく奥さんの呆れた顔を見てみたいものだ。私の釣果は１，６８０ｇで最高記録と同じだった。

痛々しい姿をカメラでパチリ。「おい待て、帽子を被る」「もう撮ってしまった」

２月１１日の釣果